

洪水があるようである。

それにしても、慈住寺はもともと一平面の土地に建てられたものではないようだ。即ち、大門の礎石だといわれるものと、塔の礎石とを比べると、一間ばかりの落差がある。既に、ある程度の扇状地が形成された台地の斜面を、整地することによって境内を一段と高くし、さらに基壇を盛り上げたのである。そして私都川が扇のように迂回して流れ、その要の所に寺が出来た。又、扇状地には門前町も出来た。これが当初の姿だと思うのである。

しかし、栄枯盛衰は世の常、平安も末期、群盗の横行する時となり、ついに寺院も焼亡の悲運にあった。それが、鎌倉に至って、昔の面影はないまでも再興され、門前町も余命を保った。程なく世は室町の頃となり、山名の一族、今島兵庫守の館が近くに出来た。それが山名と足利の不和になる京都での戦をはじめ、戦国の世、幾度かの戦陣で命を共にした強者達、これが今の慈住寺の丘の五輪となって、その度に数を増していく。かかる間にも、薬谷の浸蝕はいよいよ進み、山名と共に門前の町もだんだんとさびれていった。この間にあって、寺だけは僧兵を養い、御しがたい力となっていた。

さる程に天正の厄にあい、僧兵は寄る辺を失って四散し、土地に残った者は、今島氏族12戸と、門前の氏族12戸のみとなった。禿山となった船伏山は、文禄、慶長と山ずりを重ねて、今日の地形の仕上げをなした。この地形造りにあたって、寺の高い境内と基壇の盛り土が、ある程度の防砂堤となって、回廊の想像位置の東と西に、4.5尺の落差を残して昔の面影をとどめているのではないか。こんなことも考えられると思う。

2 節 「土師百井式軒丸瓦」の分布とその意義について

清　水　真　一

土師百井廃寺の発掘調査では、出土した軒丸瓦は1型式2種類のみであった。すでに遺物の項で述べられた通り、八葉素弁の蓮華文で、外圈を二重圈文で囲む。これは、稻垣晋也氏の『飛鳥白鳳の古瓦』によれば、山田寺式の軒丸瓦の系統に入るもので、八葉单弁蓮華文軒丸瓦ちゆうとなっていいる。わたしたちも当初その名称を使用していたが、必ずしも山田寺式の範疇に入れることはないと考え、素弁の類に含めた。

この土師百井廃寺出土の軒丸瓦は、鳥取県下では唯一の出土と思っていた。ところが、稻垣氏の論に、鳥取市菖蒲廃寺にも出土例があると記される。早速調査したところ、因幡地方の古代寺院跡の研究者の一人である木山竹治氏によって、菖蒲薬師寺から採集されていることがわかった。

現在、鳥取県立博物館所蔵である。また同博物館にはもう一つ、薬師寺出土の二重圈文素弁蓮華文軒丸瓦破片が所蔵されており、同じく研究者の一人、川上貞夫氏の採集になるものかと考えられる。県下で、薬師寺と呼ばれる古代寺院は、『因幡堂薬師縁起』にもある通り、鳥取市菖蒲・薬師寺以外になく、稻垣氏のいう「菖蒲廃寺」出土と考えてあやまりはないと思われる。さらに、土師百井廃寺の瓦を焼いたと考えられる郡家町奥谷・奥谷瓦窯出土の軒丸瓦の中に、土師百井式軒丸瓦があることも判明した。これは、画家中島菜刀氏が採集されたものを、川上貞夫氏がうけつぎ、県立博物館に所蔵されているものである。これにより、現在三カ所で土師百井式軒丸瓦が出土したことがわかる。

土師百井式軒丸瓦を出土する土師百井廃寺と奥谷瓦窯は、相距い距離に位置する。奥谷瓦窯は、広義の私都古窯跡群の西端に位置する。^{きさいち}私都古窯跡群は、おおよそ6世紀中頃～9世紀初頭にかけて須恵器を生産した古窯跡群で第1章でも述べられたが奥谷瓦窯は群中に生産が増大する時期の窯である。土師百井廃寺については、本論で述べられており割愛するが、土師百井廃寺のすぐ北東の位置にある池田廃寺からは、土師百井廃寺で使われたと同様な平・丸瓦がみられ、おそらく池田廃寺からも土師百井式軒丸瓦が出る可能性をもつ。菖蒲廃寺は、千代川の下流西岸、鳥取市菖蒲の地にあり、千代水平野が開ける喉元近くにあたる。古代山陰道は国府町国分寺附近から直線で西へ走り、千代川をわたり、服部・菖蒲附近を通り、野坂をへて吉岡へ至るルートが想定される。附近には服部遺跡が知られ、西側の丘陵東斜面には千代川左岸流域では最も新しい型式の横穴式石室墳の古海古墳があり、菖蒲廃寺との関係が強い。昭和42年に菖蒲廃寺は発掘調査され、藤原宮式軒丸瓦が少量出土した。そのため白鳳末期～奈良初期の創建と考えられていたが、今回の土師百井式軒丸瓦の確認で白鳳後期とやや古くなつた。

この三地域は、千代川とその支流私都川にある。奥谷瓦窯で生産した瓦は、陸路で土師百井廃寺へ運搬するのはたいへんな作業であるが、私都川を使った水運が可能であれば、陸路ほどのことはないと考えられる。また、私都、千代川を使えば、菖蒲廃寺までも比較的容易に運搬できたと思われる。とすれば、菖蒲廃寺出土の土師百井式軒丸瓦がなぜ奥谷瓦窯から供給を受けたのかを考えねばならないであろう。

鳥取県下で最も古い寺院関係の文献に「伊福部氏系図」がある。伊福部氏の系図は、田中卓氏が注目して以後、佐伯有清氏らの研究により、価値の高い資料と考えられている。これによると、第26代・大乙上都牟自臣の項に『^{つむじ}皇興寺の願主』とある。この都牟自臣の子が大乙上国足臣で、佐伯有清氏によれば、国足が大宝年間に何らかの公的職に就いていたと考えられ、和銅元年に死去した伊福部徳足比売臣の兄弟にあたると考えられている。とするならば、都牟自臣が活躍した時代は7世紀後半期と考えられる。彼が「願主」となった寺院は、伊福部系図からすれば因幡以外とは考えられない。この時代に比定できる因幡の古代寺院は、詳細は不明なもの出土する軒丸瓦の型式からすれば、飛鳥・豊浦寺系の素弁八葉蓮華文軒丸瓦を出す大權寺廃寺以外考えられない。ここに伊福部氏=皇興寺=大權寺廃寺と横の関係が把えられる。他に因幡では、このよう

な文献はみあたらないが、土師百井廃寺ではどのような推定ができるであろうか。土師百井の地はその名の通り、八上郡土師郷にある。土師郷と石田郷の境に位置する百井（桃井？）の土師領分を土師百井と呼ぶ。土師郷は南の大江郷とともに土師氏にちなんだ地名である。土師氏に関係した豪族のいたことが推定できる。土師氏といえば、古事記に記載された野見宿禰を祖とする豪族であり、野見宿禰は角力や埴輪作りなどの起源とされるユニークな人物であり、出雲氏の祖先としても知られる。直木孝次郎氏の研究等で、野見宿禰と土師氏との関係が文献面をとおして明らかにされている。さて、千代川下流左岸には高草郡能美郷があり、能美郷には野見宿禰命をまつる式内社大野見宿禰命神社がある。この神社の南、高草郡古海郷に作られた古代寺院が、土師百井式軒丸瓦を出土する菖蒲廃寺である。つまり、菖蒲廃寺と大野見宿禰命神社は、郷こそ異なるが同じ高草郡内に隣接し、土師氏関係の豪族がその願主であったと推定できる。そして土師百井廃寺の願主ともおそらく同族と考えられ、それゆえに土師百井式軒丸瓦の供給をうけたものと考えられる。

千代川を中心とした因幡国の奈良時代には、智頭郡内には土師郷があり土師神社がある。八上郡には土師郷・大江郷があり、曳田郷には式内社壳沼神社がありハ上姫を祀る。さらに高草郡内では能美郷に大野見宿禰命神社がある。湖山池の西、福井の地に式内社・天穗日命神社があり、天日名鳥命神社（大畠地区）、阿太賀都健御熊命神社（御熊地区）とともに土師氏の同族、出雲氏系の神々を祀る。特に天穗日命神社は、宇倍神社が正三位に位される以前、867年に共に正三位をうけ、官社に列されている。これらは県史古代編で述べられているところであるが、これらの地域の考古学的環境もまた土師氏関係の資料がみられる。土師氏の考古学的考察として、丸山竜平氏の論文がある。それによると、土師氏関係の地の6～7世紀代には、横穴・陶棺が限られてみられる。このような視点でもう一度上記の地をみてみよう。湖山池の西の三社の地は、平野も狭く、考古学的遺物も少い地域であるが、低い丘を越えた気多郡大原郷側には、下光元横穴群や大杉横穴群が集中してみられる地域である。能美郷は大野見宿禰命神社のある地だが、郷の北東千代川を渡った現在の浜坂の地には、柄木山・荒神山の二つの横穴群があり、荒神山横穴群中から陶棺が出土している。おそらく砂丘の荒地であったとみられ、千代川右岸ではあるが、広義の能美郷内に含めてよいと思われる。八上郡曳田郷では、河原町佐貫・大平1号墳の横穴式石室近くから陶棺の出土があり、土師氏との関連性が考えられる。また陶棺の製作技術は、寺院建築に用いられる鶴尾製作とも共通する点があり、特に因幡では多くの巨大な鶴尾がみられるが、奥谷瓦窯で焼いており、かつ製品とみられるものが、土師百井廃寺でも出土する。陶棺は、丸山竜平氏の前記の論によれば、全国での出土数の半数以上が美作（岡山県北部）にある。美作と因幡とは隣接し、陶棺が容易に早くから入り込んでいい位置関係であるが、美作の数量に比べ、因幡は3遺跡しかみられない。また、美作での土師氏と陶棺の関係も判明しておらず、美作には横穴がみられないという点があげられる。ゆえに、ストレートに関連性を求めるに無理があるかもしれません。しかし、因幡・美作国境附近を水源とする千代川の流域に多くの土師氏関係の足跡

をみるにつけて、因幡国の代表的豪族伊福部氏以外の、古代史に登場してこない部分で活躍した多くの豪族の存在を推定でき、その有力な一員として土師氏の存在を知り、土師百井廃寺や菖蒲廃寺は、彼らが願主となった7世紀末期の寺院であったと推定できるところである。

插図14 土師氏関係因幡地名表

